

幼稚園教育課程等神奈川県研究協議会

I 目的

幼稚園の教育課程編成及び実施に伴う諸課題並びに幼稚園を取り巻く諸課題についての専門的な講義や研究協議等を行い、教職員の指導力を高め、幼稚園教育の振興・充実を図るため、幼稚園教育課程等神奈川県研究協議会を開催する。

II 日程

第1日：令和元年7月22日(月) 13時30分～16時45分

会場：かながわようちえん会館

13:00	受付
13:30	開会・挨拶
13:40	講演「園における安全管理及び安全教育について」 講師 文部科学省初等中等教育局 視学官 湯川 秀樹 氏
15:10	質疑応答 (10分)
15:20	休憩・移動 (15分)
15:35	グループ協議 協議主題「園における安全管理及び安全教育について」 *グループ協議 1グループ各5～6人
16:05	全体報告
16:30	閉会・アンケート記入
16:45	終了

第2日：令和元年7月23日(火) 10時00分～16時50分

会場：ビジョンセンター横浜

9:30	受付
10:00	開会・挨拶
10:10	講演「幼児期に育てたい資質・能力について」 講師 聖徳大学大学院 講師 篠原 孝子 氏
11:50	質疑応答 謝辞
12:00	一昼休み
13:30	分科会受付
13:45	挨拶／運営委員紹介等
14:00	提案 (30分)

分科会	1 (協議主題1)	2 (協議主題3)	3 (協議主題5)
提案園	清川村立清川幼稚園 材木座幼稚園	湯河原町立福浦幼稚園 伊勢原八雲幼稚園	和光幼稚園 南足柄市立むつみ幼稚園

15:10	質疑応答
15:30	グループ協議・協議主題説明
15:40	各分科会内での全体報告
16:00	各グループ発表
16:20	指導助言
16:40	閉会 (各分科会ごと)・アンケート記入
16:50	終了

V分科会の記録

令和元年度幼稚園教育理解推進事業（神奈川県協議会） 研究成果の要旨

分科会 1 ＜協議主題 1＞	カリキュラム・マネジメントの適切な実施について
-------------------	-------------------------

【公立幼稚園】 提案 清川村立清川幼稚園

1 提案内容

（1） 研究主題のとらえかた

平成 30 年 4 月に施行された幼稚園教育要領では、全体的な計画に留意しながら、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ教育課程を編成すること、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図っていくこと、つまり、カリキュラム・マネジメントを適切に実施することで保育の質の向上に努めていくことが示されている。

そこで本園では、教育目標である「なかよく・たのしく・たくましく」を具現化することを目指し、教育目標を日々の園生活の中で計画的に達成することができているか、また、共に育ち、学び合う園児たちの「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」、修了までに「育てたい姿」がどのように育てているか、それらのことを検証するために、3 歳児からの成長、発達段階を見通した長期的計画と日々の保育の短期的計画について実践を通して相互に見直し、評価、改善する P D C A サイクルを定着させ、持続的な保育の改善につなげていくこと、そして教育目標や教育課程の評価、改善にも繋がられるよう、全体計画の検討及び作成、指導計画や指導案の見直しに取り組むこととした。

（2） 研究の方法及び研究の重点

平成 29 年度・30 年度は園内研究の主題を「幼稚園教育要領の理念を実現するための幼稚園における教育課程の編成、実施、評価、改善の一連のカリキュラム・マネジメントの適切な実施について」とし、今年度(令和元年度)は、一連のカリキュラム・マネジメントについて、園の教育目標である「なかよく・たのしく・たくましく」心豊かな幼児像を目指して、保育の質の向上や持続的な保育の改善、全体計画との一体的な教育活動の展開を重点に、園全体で取り組む体制の確立を推し進める。

（3） 研究内容

- ①平成 29 年度サブテーマ ～5 歳児年長組の学びや育ち合いのために～
 - ・平成 30 年 3 月に告示された幼稚園教育要領の「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」を読み説き、自園の取り組みや現在の園児の状況を分析
 - ・上記の分析を踏まえた上で、5 歳児年長組の伝統的な取り組み（運動会でのリレー、竹馬、大山登山）を通して“思考力の芽生え”に着目し P D C A サイクルでの検証
- ②平成 30 年度サブテーマ ～遊びを通して幼児が主体的に活動できる環境の構成～
 - ・年間計画の見直し
 - ・ P D C A サイクルを定着させる週日案の改善
- ③令和元年度サブテーマ ～なかよく・たのしく・たくましく 心豊かな幼児像を目指して～
 - ・ 3 歳児に視点を当て、入園後の姿から教育計画における実践を通し検証

（4） 成果と課題

これまでの取り組みを通して、教師が幼児の様子を的確に見取り、ねらいに向かって場の設定や環境を構成すること、また教師が人的環境として友達との関わりの手本になっていくことで、入園当初は下を向き一人で砂場遊びをやっていた年少児も、友達と同じ遊びを楽しむ中で会話が生まれ、友達との関わりを広げていく姿がよくわかり、今後の手立てを考えることができるようになった。また、週日案の改善から、幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿との関連性を確認し、日々の振り返りで環境を再構成していくPDC Aサイクルの定着の大切さを感じた。

課題として、短期的計画をPDC Aサイクルで見直すことができて、長期的計画と関連付けた確認のしにくさが見えてきた。そこで全教師が他クラスの取り組み内容を共有できるように目で見えて理解できる10の姿を意識した全体計画の見える化に取り組み始めている。全体計画を月や学期ごとに見直し、評価、改善し、職員が常に確認できるよう掲示をする等、今後も実践しながら取り組み、検証していきたい。

2 研究協議内容

視点① 教育課程に基づき組織的かつ計画的に各幼稚園の教育活動の質の向上を図っていくためには、どのような工夫が必要か。

- ・PDC Aサイクルを用いた事例分析シートを活用し、幼児の育ちや学びを評価、反省し、学びの連続性にポイントを置いている。また、環境設定への意識を高めるため、週日案の改善が図られている。
- ・PDC Aを分かりやすく示した日案を作成していたり、週日案の中に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点として取り入れたりして、幼児の姿の分析を行っている。そのことが、子どもに対する理解や職員の学びにつながっている。

視点② 全体的な計画の作成について、教育課程とその他の計画を関連させ、一体的に教育活動が展開されるようにするには、どのような工夫が必要か。

- ・全体的な計画を月や学期ごとに見直し、評価、改善し、職員が常に確認できるよう掲示をする等、実践しながら取り組んでいく。
- ・保護者や地域との連携も大事なことである。園生活での遊びを通して、どのような力をつけているのかを具体的に伝えていくことで、幼稚園への理解が深まる。

3 指導助言より

- ・園長先生のリーダーシップの下、全職員が各々の意見を出し合いながら研究を進めていた。
- ・3年間継続した研究であり、その中でPDC Aサイクルが確立されている。また、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿に視点をおき、園児の分析を行っていた。
- ・「事例分析シート」を活用し、学びの連続性にもポイントを置いたり、週日案の改善がされたりしていた。
- ・幼稚園やこども園がカリキュラム・マネジメントを実施する上で大事なことは、日々の保育の中で、園児一人ひとりが自ら環境に関わり、自分で考えたり、友達と一緒に試行錯誤して意見を出し合ったりしながら、失敗しても諦めずに繰り返して取り組んでいくことができる循環を作ることである。
- ・目の前の園児がどんなことに興味をもち、どんなことをしたいのか。その実現のためには、どのような環境を整えて関わると良いのか。園児の姿や声を見たり聞いたりして、幼児理解をしていくことが大事である。それが園の全体的な計画につながっているのかということの検証につながる。
- ・幼児理解をする上で大事なことは、教師自身の指導を振り返ることである。そのためにも記

録が大切である。

- ・保護者や地域との連携も大事なことである。園生活で遊びを通してどのような力をつけているのかを具体的に伝えていくことで、園生活への理解が深まる。

【私立幼稚園】 提案 材木座幼稚園

1 提案内容

(1) 研究主題のとらえかた

材木座幼稚園は、今年度新任の職員が2人担任として入ったことと、主任がクラス担任の為新人の指導に当たることが難しい状況であることから、今回自園でのカリキュラム・マネジメントの適切な実施をするために、カリキュラムの見直しと園内研修の見直しが必要と考えた。

(2) 研究の方法及び研究の重点

①カリキュラムの見直し

新任の職員でもカリキュラム・マネジメントの実施が出来るように、以下の点に留意しながら見直しを行った。

- 1：経験の多少にかかわらず、理解しやすいカリキュラムとなること
- 2：毎日のクラス運営に取り組むために具体的にわかりやすいカリキュラムであること
- 3：1年間を流れてとらえて行事を見据えた計画を立てる
- 4：道具（はさみ・のり・テープなど）を、どのように使わせていくか具体的に表記する
- 5：年間を通して学年を越えて関わることのできるカリキュラムであること

見直したカリキュラムは学年ごとに冊子にし、参考にしながら日々の保育を進めていけるようにしている。

②園内研修の見直し

材木座幼稚園では2017年度より園内研修を行っている。毎年より良い園内研修を行うための重点として、前年度の振り返りを行い、挙げた反省点を改善することに加えて、その年の職員構成や保育の重点も踏まえ、その都度見直しをしている。

(3) 研究内容

①カリキュラムの見直し

今年度に見直しを行い、実際に指針として現在使用しているため、月ごとに振り返りをしながら次年度以降により良いものとなるよう改良を進めている。新任の職員は、経験を積んだ職員に教えてもらうことや、相談もしている。また、このカリキュラムがあることで、材木座幼稚園の基本的な教育を理解できるようにしている。

②園内研修の見直し

園内研修の見直しを行ってきた過程は以下の通りである。

<2017年度>

これまでは一斉活動中心の園であったが、クラスや学年の枠を超えて興味のある子が活動に取り組めるような、子どもの遊びを大切にしたいクラスや学年にとらわれない自由な幼児教育を目指した。また、保護者に日々の保育の中で発展した活動を伝えたいと思ったことから、ドキュメンテーション（写真つきお便り）を発行し始めた。

しかし、園内研修で進めてきた活動について振り返りをする中で、子どもの活動を発展させたいという職員の思いが空回りし、子どもに寄り添った環境設定ができていなかった。また、PDCAサイクルを意識しておらず、無謀な活動計画だったこともあった。そして、保護者に伝えるために始めたドキュメンテーションだったが、お便りとして保護者に発行することを意識しすぎて見栄えにこだわってしまい、紙面作りに時間がかかった。これは職員の負担も大きいうえに、職員の思いは伝わりにくかった。

<2018年度>

昨年度の反省を活かし、子どもの活動を共有する為に週1回の話し合いの時間をもった。この話し合いの中で環境設定について考え、それぞれが工夫したことで、子どもの小さな活動にも目を向けられるようになった。またドキュメンテーションの反省も活かすため、簡単に子どもの遊びが伝わるドキュメンテーションを発行した。

この年の反省点は、PDCAサイクルを意識して子どもの遊びに取り組める職員もいたが、うまく取り組めない職員もいたことで職員間に遊びの読み取りの力の差を感じ、スキルアップの必要性を感じたことであった。また、保護者へのドキュメンテーションの発行を意識しすぎて、気軽な子どもの姿を探ることができなかった点も挙げた。

<2019年度>

昨年度の反省に加えて今年度は初担任が2人いることと、主任がクラスを持っているため、現場で直接指導ができない点に配慮し、園内研修に取り組んでいる。昨年度から続けている週1回の話し合いでは、写真を持ち寄り、その時の状況を話すことで、経験や力量によって子どもの遊びの読み取りに差が出ないようにした。また、新任クラスに経験年数の高い職員が入り、新任の職員は補助をしながら見学するという、担任を交代する方法の研修も行っている。終了後に振り返りも行うことで、材木座幼稚園に合った方法を見て学んでいる。

(4) 成果と課題

<研究の成果>

- ・この3年間の取り組みの中で、子どもたちが生き生きと活動に取り組めるようになってきたと感じている。また、カリキュラムや園内研修を見直すことで、カリキュラム・マネジメントがしやすくなった。カリキュラム・マネジメントの適切な実施に努めるために、自園に合った方法を柔軟に考えていくことが大切であると考えている。今後もより良い教育を目指し、改善を続けていきたい。

<今後の課題>

- ・活動が発展していくために必要な具体的な援助だけでなく、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の共通理解が出来るようにする。
- ・子どもが主体的に活動する姿を読み取り、評価・改善・計画を行う効率的な時間の使い方を考える。
- ・カリキュラム・マネジメントが機能しているか定期的な見直しをしていく。

2 研究協議内容

視点① 教育課程に基づき組織的かつ計画的に各幼稚園の教育活動の質の向上を図っていくためには、どのような工夫が必要か。

- ・どこの園も職員同士での情報共有を大切にしているが、人数により全体で行う時間が難しいと感じているところが多い。そのため、付箋を活用したり、学年での打ち合わせをしたり、それぞれの方針や職員構成に合った方法を取り入れている。
- ・PDCAサイクルを意識し、週日案の作成や毎日の反省を繰り返し行うことで、子どもに対する理解や職員の学びにつながっている。

視点② 全体的な計画の作成について、教育課程とその他の計画を関連させ、一体的に教育活動が展開されるようにするには、どのような工夫が必要か。

- ・写真を用いて保育の見える化をすることで、保護者にとっても園での子どもの様子がわかりやすく、職員にとっても子どもの育ちの確認につながっている。
- ・園の教育活動に応じて、保育ボランティアや内部外部リソースの活用をしている。

3 指導助言より

- ・カリキュラム・マネジメントはなぜ必要なのかをしっかりと押さえていくことが重要である。それは、子ども達の豊かな発達を援助していくために必要である。そのためには、どのような援助をしていかなければならないのか。それを考えることが保育の質の向上につながっていく。
- ・保育の質を高めるとはどのようなことなのか。各園の状況や子どもの数、地域などそれぞれ違う中で、各園にあった教育をみつけていくこと。どのような子ども達を育てたいのか、どのような教育を求められているのか考えていくことが必要である。
- ・物的環境・人的環境の全てが子どもの学びに繋がっていくので環境を通して保育していくこと。園にいる全職員が人的環境となる。また、園の環境を全職員で見直していくことも大事なことである。
- ・新採用の職員にとっても丁寧に寄り添っている。一人ひとりが生き生きと保育に向かっていくことができる体制づくりができていく。園の一人ひとりがやりがいをもてるようにしていく。また、保育室の環境や保育の仕方など互いに園内で見合っていくことが教師の学びを深めていくことができる。
- ・どのような思いで教師が保育しているのか、その思いが保護者に伝わっているか。
- ・少子化が進み、少人数保育が多い中で、友だち関係を築くことが難しくなっている。保護者や地域の方と協力しながら子ども達を育てていく。
- ・園内で試行錯誤しながら、良いものを取り入れたり、工夫したりして様々試してほしい。それが保育の質を高めることにつながり、PDC Aのサイクルになっていく。

第2分科会 ＜協議主題3＞	幼稚園教育と小学校教育との接続の推進について
------------------	------------------------

【公立幼稚園】 提案 湯河原町立福浦幼稚園

1 提案内容

(1) 研究主題のとらえかた

子どもの発達と学びの連続性を確保するため、幼稚園教育と小学校教育が円滑に接続し、連携が組織的に行われることが極めて重要である。遊びを中心とした生活を通して体験を重ね、一人ひとりに応じた総合的な指導を行う幼稚園と、時間割に基づき各教科の内容を教科書などの教材を用いて学習する小学校では生活の仕方や教育の方法が異なっている。そのような学校種の違いを踏まえ、幼児期の学びが小学校入学後の子どもの成長にどのように繋がっているかを探る必要があるのではないかと。幼小接続の取り組みを進めるには、子どもの発達や学びの連続性を踏まえた幼児期から児童期にかけての教育の繋がりを理解し、カリキュラムや指導の改善を行う必要がある。

そこで、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた情報交換や意見交換、保育参観や授業参観を行い、幼児、児童それぞれの実態、幼稚園教諭、小学校教諭それぞれの指導内容を整理することをもとに、接続期のカリキュラムがより充実し円滑な接続となるよう工夫・改善を行う。

(2) 研究の方法及び研究の重点

- ①「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を生かした教員交流を図る。
- ②カリキュラムの工夫・改善を進める。

(3) 研究内容

① 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を生かした教員交流を図る

<「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を生かした児童の実態把握を行う>

- ・ 小学校教育課程（第1学年学級経営案）と幼児教育との繋がりを探る。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と結びつけることで、幼児期の姿との関連性をより具体化し理解を深める。また、5歳児（昨年度）の年間目標と1学年4・5月（スタート期）の重点目標の関連性を探る。
- ・ 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた聞き取りシートを作成し活用する。
1年生担任の指導について幼稚園との違いを把握し、それを幼児教育と小学校教育の学びを繋ぐ指導のポイントとして活用する。
- ・ スタート期の児童の実態や指導内容を、聞き取りシートや児童の様子を写した動画から把握し、幼児期から児童期の発達の流れを理解する。
- ・ 1学年の授業（6月）を参観し、スタート期からの連続的な発達の流れを知る。

<「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を生かした幼児の実態把握を行う>

- ・ 幼児の実態や指導内容の把握
5歳児クラスの進級時から接続期にかけての発達の流れや、幼稚園教諭の指導内容を長期的な視点で捉えて小学校教諭に把握してもらおう。それをもとに幼稚園の教育内容、指導方法についての小学校との違いや共通点への理解を深める。
- ・ 保育参観、意見交換会の実施
アプローチ期にある10月からの5歳児について、小学校教諭による保育参観を行う。その際、具体的な幼児の姿やエピソード、教諭の指導内容を記録し共有できるよう、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりとした参観シートを作成し活用する。
- ・ 幼稚園教諭と小学校教諭の合同研修会の実施
幼小接続を進めていくために、幼児期と児童期のそれぞれにおける教育課程や教育方法等がどのように異なるのかを資料などをもとに把握し、相互理解を深める。

① カリキュラムの工夫・改善を進める

研究を通して得られた小学校教育との共通点や関連性、共通の課題などを踏まえ、カリキュラムの工夫・改善を行う。

- ・ 指導の重点化
小学校教諭からの聞き取りや授業参観での見取りから、現在の5歳児と1年生の共通の課題は、「相手の話に耳を傾けたり、伝え合ったりすること」であることが見えた。そうした力を育てていくことを重点化したカリキュラムの工夫・改善を図る。
- ・ 具体的改善として考えられること
幼児が「相手の話に耳を傾けたり、伝え合ったりすること」ができるようになるためには、幼児自身が心を動かされる体験を通して気持ちを共有する環境構成や、自分の経験や気持ちを「話してみたい、伝えてみたい」と思えるような教師の援助が必要であると捉えた。今年度のカリキュラムの伝え合いの部分の環境構成や教師の援助をより具体化していくことで、接続に向けての指導の充実を図っていく。

(4) 研究の成果と課題

<成果>

- ・ 接続カリキュラムを意識することで、スタート期の子どもの姿や指導の実際を知り、幼児教

育をより充実させていく必要があることが明らかになり、具体的な指導の工夫・改善に繋ぐことができた。

- ・スタート期の児童の姿や課題を共有する機会を設けることで、小学校生活や小学校教育についての理解を深めることができた。その中で小学校教師の児童を見る視点や捉え方、スタート期の指導方法を知り、幼児教育との繋がりが見えた。

<課題>

- ・幼稚園教諭と小学校教諭が情報を共有するための時間の確保が難しいため、幼児の実態や学びを小学校へ発信していく方法を豊かにしていきたい。
- ・就学に向けて、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」についての理解を更に深める必要がある。接続期の子どもを見るための幼稚園と小学校の共通の視点であることや、すべての子どもに同じように身につけさせるようにすることが目的ではないことを踏まえたうえで、相互理解を深めることができる「学び合いの場」を設定していきたい。

2 研究協議内容

視点① 幼稚園と小学校が連携を図るためには、どのような工夫が必要か。また「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」についてはどのような活用が考えられるか。

- ・保育や授業の様子を参観し、互いの取り組みを知る機会を増やすことで、幼児・児童理解を深め、就学に向けて育ちをつなげていく。
- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を互いの現場でどう生かしていくか」というテーマで合同研修会を行い、幼・保・小の職員で共有し、小学校の育てたい児童の姿と関連付けていく。
- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をどのような場面でどのような見取りをしたか、幼児の姿の記録や日案、週案などに入れていく。

視点② ①を踏まえて、幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続を推進するためにどのような工夫が必要か。

- ・年長の後半、主に3学期の幼児の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をしっかり捉え、アプローチカリキュラムを編成していくことが求められている。
- ・アプローチカリキュラムは、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりとしながら、幼児の学びを小学校生活に適切につないでいくための年長後期に幼稚園で実施するカリキュラムである。アプローチカリキュラムがあることで、園での保育形態や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の捉え方を小学校へと伝えていくことができる。また、保護者の就学への不安が軽減されるのではないかな。

3 助言指導より

- ・幼稚園と小学校が隣接していて、交流、連携をしているものの、円滑な接続に関してのつながりが欠けているという点で、園から発信をし、話を聞く姿勢や伝えることの大切さという共通の課題を見出し、カリキュラムにつなげていくことができたことや、参観シートの活用法、小学校の先生と探り合うなど大きな収穫があった。幼児期の学びが小学校入学後の子どもの成長にどのようにつながっているか探るといふ今回の取り組みは今後も継続していくとよい。
- ・年長の後半、主に3学期の子どもの『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』をしっかり捉え、アプローチカリキュラムを編成していくことが幼稚園に求められている。
- ・アプローチカリキュラムは、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を手掛かりとしながら、園で行われる幼児の学びを小学校生活に適切に繋いでいくための年長後期に幼稚園で実施する

カリキュラムである。職員の交流や連携は異動の関係でうまく引き継がれなかったり、多忙で円滑な連携が取れなかったりすることがある。アプローチカリキュラムがあれば、園での保育の形態や幼児期の終わりまでに育てほしい姿の捉え方をぶらさずに伝えていくことができる。また、保護者の就学への不安が軽減されるのではないかと。

- ・小学校との連携や交流を今後も継続していくと共に、小学校へ交流を求めるばかりではなく、求める前に自分たちが『幼稚園だからできることをする』という意識も変えていかなければいけない。
- ・今回の研究協議で出てきたことや興味もったことなど、ぜひ一人だけではなく、園全体で協力し挑戦していったらいい。

【私立幼稚園】 提案 伊勢原八雲幼稚園

1 提案内容

(1) 研究主題のとらえかた

本園では、幼稚園教育と小学校教育との接続として、卒園後の子どもたちの様子を見に行き、その後話し合いをしたり、近隣の小学校へ行き子どもたちの交流や地域連絡協議会で小学校に幼稚園・保育園の職員や地域の方々が集まり情報交換などを行ったりしている。また、園児が卒園する際には、幼稚園幼児指導要録の小学校への送付や、直接子どもたちの聞き取りを小学校の教諭が来て行うなどの連携は行っている。伊勢原市という地域柄もあるのか、昨年度年長 90 名の卒園児がいて進学した小学校数は 19 校となる。各小学校と直接的にこれ以上の連携をしようとしても実際的に難しい面がある。そこで、まずは、本園で出来る幼小連携の在り方を考えていくこととした。

(2) 研究の方法及び研究の重点

- ①本園の行っている幼小連携の振り返りを行う。

本園では、平成 21 年 4 月より「幼小連携に係る小学校教科の取り組みについて」として、年長組に進級する前に手紙を配布している。まずは、その手紙について担任の先生にアンケートを取り、現在の取り組みを振り返り、そこで見えてくる課題を探る。

- ②今回の幼稚園教育要領改訂でもポイントとなっている「幼児期の終わりまでに育てほしい姿」や「育みたい資質・能力」の 3 つの柱の 1 つでもある「主体的・対話的で深い学び」に焦点を当て、これからの本園の教育をどう行っていくのかを考えていく。

(3) 研究内容

- ①本園の行っている「幼小連携に係る小学校教科の取り組みについて」の振り返り

平成 21 年 4 月より取り組み始めた当時言われた「小1プロブレム」を受け、近隣の小学校の校長先生や小学校 1 年生の担任に幼稚園へ来てもらい、ひらがなの取り組みを実際に見ていただいたり、進級先である小学校が感じていることや困っていること、そして八雲幼稚園の活動や保育に対する思いを話し合い、情報交換をする中で、幼小連携の取り組みを考えていった。

目的として【園児たちの幼小移行をより円滑にするため、教科面・生活面について支える】

【小学校に対する期待感（楽しさ・学習など）を育む】の二つをあげている。

作成開始当初は年間目標が小学校 1 年 1 学期のあゆみ（取り組み）を意識し作られた。また各項目（教科）を到達目標と考え、日々の保育の中で取り組みを行ない、子どもたちの成長に繋げていこうという経緯がある。また、手紙のタイトルにも『幼小連携に係る小学校教科の取り組みについて』と記載されているように、小学校教科の先取り学習のような形として行っていた。その後、年度ごとに見直しを図り、図工や体育などは具体的な項目ではなく、楽しんで参加し取り組めることを大切にするなど、本園で行っている保育を主にした項目に変えるなど、到達目標を目安と位置づけて取り組みを行ってきた。また、これまで行ってきた一斉保育か

ら子どもたちが主体的に取り組める保育を意識して心掛けるようになってきた時期でもある。上記の様に『幼小連携に係る小学校教科の取り組みについて』見直しを行なってきたが、近年は例年に倣ってあまり見直すことなく保護者に配っていた傾向があったことも否めない。これまで行ってきた幼小連携に係る小学校教科の取り組みについて実際にどのような保育を行っているのかを担当の先生たちにアンケートを取り、意識調査を行った。

【アンケートからの読み取り及び今後の方向性】

- ・クラス数が少ないので、グラフからの読み取りは難しいが、年長児に向けて手紙を配っていることもあるが、低学年のクラスは意識をして取り組むのが難しい項目もあるように感じる。また、基本的な考えとして幼小連携とは就学前の年長児だけが取り組むのではなく、入園から卒園までの間で年齢に応じて出来る事を行なっていくことが自然と10の姿につながっていくと考える。

② ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」

幼小連携を考えていく中で「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」はとても大切なキーワードの一つである。これまで行ってきた保育を振り返り、本園で入園から卒園するまでに子どもがどう育っていくのか、どのようなことを気にかけて保育をしていけばよいのかを【幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿】に照らし合わせて考えていき、これまで行ってきた「幼小連携に係る小学校教科の取り組みについて」に変わる新たな幼小連携の在り方を作っていく。また、アンケートの読み取りからも見えてきたように幼児期の終わりである年長児だけでなく、学年ごと10の姿を念頭に置いてこれまでどのような保育を行ってきたか、また振り返ることで10の姿が育っていくためにどうしたらよいかを話し合い、『やくも幼稚園を卒園するまでに育ってほしい10の姿と目指す保育』として表にまとめた。

- ・「主体的・対話的で深い学び」

今年度が始まる前に、今回の教育要領の改訂を踏まえて本園として取り組もうとしている考えを表した書類を全職員に配り周知した。

(4) 研究の成果と課題

今回の教育要領の改訂で幼稚園・保育園・こども園のどこの園に通っていても就学前までに同じ教育を受けられるようになったこと、また幼児期の終わりまでに育ってほしい10の具体的な姿が示された。それを受け、研修会や近隣の小学校教諭から就学前までに培ってきた力を土台にして、子どもたちが「主体的」「対話的」「深い学び」が出来る様、授業を行っていると聞くことがあった。今回の幼稚園教育要領の改訂から始まり、小学校、中学校と学習指導要領が順に改訂されることで、これまでぶつ切りだった学校間が連携していくことが求められる。土台となる幼児期にかかわる施設がまずはしっかりと内容を理解し、各園が具体的にどのような教育・保育を行っていけばよいのかを考えて実践していくことが連携の第一歩になっていくと考える。本園としては、今回の発表をきっかけに『やくも幼稚園を卒園するまでに育ってほしい10の姿と目指す保育』の表を作成したが、これはまだ完成した訳ではなく今後も日々の振り返りを行いながら、構築していき、やくも幼稚園を卒園していく子どもたちが小学校に進学しても自分の力や持ち味をしっかり出していけるような保育を目指していきたい。

2 研究協議内容

視点① 幼稚園と小学校が連携を図るためには、どのような工夫が必要か。また「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」についてはどのような活用が考えられるか。

- ・交流の計画案を作成して、互いの交流活動のねらいや教師の配慮点等を明確にし、共有してい

- く。また、交流後に反省をし、次回へとつなげていけるようにする。
- ・園と学校間で、保育及び授業参観をし、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりとして、実際の子どもの姿を互いに見取り、幼児・児童の育ちを理解していく。

視点② ①を踏まえて、幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続を推進するためにどのような工夫が必要か。

- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりとして見取った幼児・児童の育ちを相互理解し、育ちがつながっていくようなスタートカリキュラムの作成をしていく。

3 助言指導より

- ・アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムを幼・小で一緒に作っていけると良い。話し合いをし、互いに思っていることを発信していくことが、連携の大きな一歩になるのではないか。
- ・休み時間の活用をすると良い。学校でやっている9教科の意義が遊びの場面で生きているのではないか。小学校でも遊びの場を用意することで、子ども達の力が発揮できるのではないか。
- ・小学校へ行く時に、小学生になったという気持ちをもたせることが、子どもを成長させていくので、段差をなくすのではなく、少し低い段差にすると良いのではないか。
- ・近隣の幼稚園や保育園・こども園と連携をし、小学校が連携で何日も時間をとらなくてもよくなるように一緒に小学校に行く時間をつくるように話をする時間をつくるなど、自分達ができることを見つけて行っていくことが大事である。

第3分科会 ＜協議主題5＞	幼稚園生活が幼児にとって安全なものとなるような環境の配慮や指導の工夫について
------------------	--

【公立幼稚園】 提案 南足柄市立むつみ幼稚園

1 提案内容

(1) 研究主題のとらえかた

近年、幼児が犠牲となる交通事故が多発していることが大きな問題となっている。交通安全の習慣を身につけるには、日常の生活を通して交通上の決まりに関心をもたせるとともに、家庭と連携を図りながら指導をし、繰り返し体験を通して行うことが必要であると考え。また、災害時の行動の仕方や、不審者との遭遇など様々な犯罪から身を守る対処の仕方を身につけさせるために家庭、地域社会、関係機関などと連携し、幼児の安全を図るための訓練等が重要であると考え。

そこで、幼稚園が幼児一人ひとりにとって安全な場所であり、幼児が健康で安全に落ち着いて遊ぶことが出来るように、園内の職員が安全教育について共通理解をしておくことが重要である。幼児が自分で状況に応じて機敏に体を動かし危険を回避するようになるためには、日常の生活の中で十分に体を動かして遊び、その中で危険な場所、事象、状況などがわかり、その時にどのようなしたらよいか判断し、体験を通して学んでいく機会を積み重ねていきたいと考える。

(2) 研究の方法及び研究の重点

- ①様々な災害・事故・犯罪から幼児の安全を図るための年間計画等の見直しをする。
- ②教師間・家庭・地域・学区小中学校と連携した安全指導の実施について見直し、連携を深める。
- ③幼児が状況に応じて機敏に身体を動かし、危険回避するようになるための柳沢運動遊びを実施

する。

- ④ 幼児が自ら考えて表現し、主体的に遊ぶための環境や教師の援助について考え、安全面に視点を
おいた振り返りを行い、次への手立てを考える。
- ⑤ 家庭に協力してもらい、「安全に対するアンケート」を実施し、保護者の安全に対する理解を
深め安全意識を高めていく。

(3) 研究内容

① 安全計画及び安全指導について

- ・ 安全教育計画の作成
- ・ 安全指導年間計画の作成と訓練の実施
- ・ 緊急時対応マニュアルの作成
- ・ 関係機関への通報と連絡網の整備
- ・ 園庭マップの作成
- ・ 活動記録の作成

② 安全指導の実施について（関係機関との連携の観点から）

- 1) 学区幼稚園・小学校・中学校との連携について
 - ・ 合同引き取り訓練の実施
- 2) 南足柄市交通安全母の会との連携について
 - ・ 企業とタイアップした安全指導の実施
 - ・ 交通安全教室の実施
 - ・ 交通安全母の会だよりの発行
- 3) 警察、スクールサポーター、南足柄市育成センターとの連携について
 - ・ 幼児の不審者対応訓練の実施
 - ・ 教師の不審者対応訓練の実施
 - ・ 園庭開放時における安全指導の実施
- 4) 地域との連携について
 - ・ 和田河原自治会による就学前の交通安全指導の実施
 - ・ 和田河原自治会福祉会による園庭整備の実施

③ 柳沢運動遊びの計画的な実施

- 1) 柳沢運動遊び研修会（教師力の向上）の実施（教育委員会との連携）
- 2) 年間計画に基づいた柳沢運動遊びの実施
- 3) 危機回避能力の向上につながる実践

④ 園内研究会の実施

- 1) 研究の方法
 - ・ 動画を活用した記録
 - ・ 評価の観点に沿ったカンファレンス
- 2) 園内研究会の評価点
 - ・ 幼児が自らやってみたいと心を動かす環境が用意できていたか。
 - ・ 幼児が友だちと一緒に遊ぶ楽しさや喜びが感じられるような言葉がけができていたか。
 - ・ 幼児が安全に遊びを楽しめるための環境や配慮はできていたか。

⑤ 保護者アンケートの実施

(4) 研究成果と課題

- ・ 安全教育計画を見直し、安全指導年間計画を再編成したことで、職員一人ひとりの安全意識が

高まり、見通しをもって指導することができた。

- ・社会では、様々な事件や事故が起きているが、保護者や子どもたちの危機意識はまだまだ低く感じる。身近な事案だけでなく、情報を収集して自分たちの身に置き換えて考え、緊急時にスムーズに行動できるように防災訓練や防災について学ぶ機会をつくるなど、園児・保護者・教師それぞれが安全意識をより高められるようにしていきたい。
- ・危機回避のためのリスクマネジメントについて徹底した未然防止対策を行ってきた。今年度、クライシスマネジメントについて職員の意識がいっそう高まった。事故、災害等に職員がスムーズに対応したり、通報や連絡網の再確認を意識的に行えたりしたことは大きな成果である。
- ・様々な実践から、幼児が安全に幼稚園生活を過ごすためには、家庭・地域との連携は非常に大きいことを再確認した。地域に根ざした教育活動の充実が幼児の安全な生活の基盤につながっていくことがわかった。また、園内での遊びや生活の中での安全について、さらに研究を深めていきたいと考える。

2 研究協議内容

視点① 事故・災害時等の危険及び不審者との遭遇など様々な犯罪から幼児の安全を図るためには、各幼稚園では園庭や園舎などの環境をどのように工夫することが必要か。また、安全に関する指導及び安全管理の両面を効果的に実施するため、教職員による協力体制、家庭、地域社会、関係機関などとの連携はどのように工夫することが必要か。

- ・園庭マップの作成と活用については、幼児の遊びを研究し、その中にどのようなリスクが潜んでいるのかを考えることが重要である。
- ・「強い地震が起これば、固定していないものは全て動く」ということから、設置家具の固定や家具の上に置いてあるものが落ちてこないようにするにはどうすればよいか等を考え、環境の整備を進めていった。
- ・学区内の幼・小・中と連携を図り、合同引き取り訓練を実施している。また、警察やスクールサポーターとの連携の中で不審者対応訓練の実施、地域との連携で就学前の交通安全指導の実施等、地域社会全体で幼児の安全教育を推進していく。
- ・園外保育をする道路の見直しや下見を行い、危険箇所を教師間で共通理解することが大切である。

視点② 幼児が遊びや生活の中で安全に関する構えを身に付けるためには、どのような環境の構成や教師の関わりが必要か。

- ・「幼児が遊びや生活の中で安全に関する構えをどう作っていくか」と考えた時、「訓練」と思いがちである。その中で、幼児自身がただ保育者の指示に従って行動するのではなく、その都度どのように行動したらよいか問いかけながら、繰り返し行っていくことが大切である。
- ・日々の遊びの中で危機回避能力を育てるということでの柳沢運動遊びの計画的な実施や園内研究会の実施があった。これにより、幼児の主体性をどう見とり、実践していくかが大切である。

3 指導助言より

- ・安全指導計画の作成と見直し、それに基づいた実施、緊急対応マニュアルの作成、子どもの活動記録を活かした園庭マップの作成と活用、地域の自治会や小・中学校との連携、保護者アンケートの実施があった。どの園でもやっていることだと思うが、これをどう活かしていくのが重要である。
- ・日常の遊びの中で危機回避能力を育てるということでの柳沢運動遊びの計画的な実施や園内研究会の実施があった。これにより、子どもたちの主体性をどう見とり、

実践していくかが大事である。

- ・園庭マップの作成と活用について、ただマップを作るのではなく、子どもたちの遊びを研究し、その中にどのようなリスクが潜んでいるのかを考えることが重要である。
- ・日々変化する遊びの中で、どのような想定外が起こるのか、具体的に見ていくという視点が活かしている実践であった。これが大切なポイントだと思う。
- ・自分の命は自分で守るという意欲を育てるためには、園内研究で子どもたちを見とる目を鋭くしていくことである。子どもたちの主体性や夢中になっていることなどを見とり、その延長上に具体的な安全に関する構えを育てるという視点が提案にある。これは大事にしなくてはならないことである。
- ・当たり前ではあることも、自分たちがやっていることに意味づけをしていく、価値づけをしていくことを大切にすることで、日々の安全指導や見直しにつながっていく。

【私立幼稚園】 提案 和光幼稚園

1 提案内容

(1) 研究主題のとらえかた

平成23年の東日本大震災で、園庭の一部に液状化現象が起こり体育館が傾いてしまったことをきっかけに、園舎や園内の耐震の見直しを行った。

平成28年6月に危機管理アドバイザーの国崎伸江先生の「幼稚園における危機管理」の講演会に出席する機会があった。その中で「保育室は耐震対策をしているが、職員室は見落としがちである。職員室にいる先生が生きていなければ子どもたちは助けられない」という話を聞いて衝撃を受けた。このことをきっかけに幼稚園生活が子どもたちにとって安全な場所になるために環境整備に取り組む。

また、地震や災害が起きた時に職員や子ども達が落ち着いて避難できるようあらゆる場面での訓練をし、「想定外の災害を想定内にする」ためにどうしたらいいのか考えていく必要がある。

(2) 研究の方法及び研究の重点

- ① 園舎内・園庭の安全の見直し、環境整備をする。
- ② 定期的に職員会議で震災マニュアルの確認と見直しを行い、園内の安全確認をする。
- ③ 定期的に子ども達と避難訓練を行い、自分で考えて行動できるようにする。

(3) 研究内容

①保育室の整備

地震耐震診断では何もしなくてもヒビが入る程度という結果が出たが、より安全を図るため耐震補強として平成27年に1階保育室に「鉄骨ブレース・スリット」を2か所設置する。

また、保育テーブルは今まで積み重ねていたが、壁立てテーブル収納板を設置して壁の上下にドアのハンドル（取っ手）をつけ、平ベルトで保育テーブルを壁に固定した。保育室の中央に地震の際、子ども達が集まる目印をビニールテープで貼ったり、蛍光灯に飛散防止カバーをかぶせたり、収納棚からの落下防止のためすべり止めシートを敷いた。アップライトピアノやグランドピアノも移動や転倒軽減のため床や壁にアンカーを打って固定した。

②その他の部屋

講堂の屋上も災害発生時の避難場所の一つとして天井に開閉型の屋根と遮熱ゴムチップを設置した。職員室は2段重ねで使用していたキャビネットを1段にし、倒れ防止を図った。壁にアンカーボルトで留め付けて固定した。パソコンもモニターと本体は倒れ防止のため市販の

「耐震ゲル」を敷き固定した。二階廊下にある共同の本棚も横に倒して使用し、倒れないようにストッパーを取り付け、棚板からの本の落下軽減のため手前にガードテープを貼った。

③その他の整備

緊急地震速報の警報器や AED を設置したり、防災頭巾をサイズの合った自分の力でかぶれるものに変えたり、上履きも外に避難することも考え、底が厚く脱げにくいものを園の指定とした。

また、全園児入園時に「個人防災セット」を購入し、園で保管している。園庭の木も植木屋さんに点検してもらい地震で倒壊の危険のある木は伐採した。

④主な避難訓練について

「自分の身は自分で守れるようになる。」「いざという時に自分で考えて行動できるようになる。」ことをねらいとして時間や場所を変えて避難訓練を行っている。地震が起きたらまずは安全な場所で「ダンゴムシのポーズ」を取ることを指導している。何度も行うことで習慣となり地震が起きた時などにすぐにこのポーズを取るようになった。年に2回講堂や講堂屋上に避難し、保護者へ引き渡す親子引き渡し訓練を行っている。また、園外へ避難することも想定して散歩や園外保育の時に友達と手をつながないで前の子と距離を開けないように歩く練習もしている。普段から子ども達に地震の際、転倒の恐れのあるピアノの近くで遊ばないこと、避難の妨げになるドア付近におもちゃを置いて遊ばないことなどを指導している。

園外保育の行き先は、できるだけ保護者が徒歩でも迎えに来られる範囲内になっている。年長組は横浜市民防災センターに行き、地震の揺れや火事の時の避難の体験をしている。

(4) 研究成果と課題

<研究の成果>

- ・講演会に出席してから職員の意識が変わり「友だちと手をつなぐ、距離を開けずに歩く」など、普段の保育の中でも“避難を想定した動き”や“安全に配慮した保育”を考えるようになった。(=「気づきを生かした保育」)
- ・「想定外の災害を、想定内にする」を目標に、新年度ごとに園独自の「震災マニュアル」を作り、職員全員での共通理解と確認・定期的な見直しを行うようになった

<今後の課題>

- ・救急救命講習の回数を増やし、AEDの使い方などを覚えて自信をもって実践できるような技術を身につける。
- ・通園バス中の避難場所を決めて、実際にできるかどうか検証する。
- ・職員もマニュアルを参考にし、自分で考えて行動できるようにする。

2 研究協議内容

視点① 事故・災害時等の危険及び不審者との遭遇など様々な犯罪から幼児の安全を図るためには、各幼稚園では園庭や園舎などの環境をどのように工夫することが必要か。また、安全に関する指導及び安全管理の両面を効果的に実施するため、教職員による協力体制、家庭、地域社会、関係機関などとの連携はどのように工夫することが必要か。

- ・避難訓練は各園計画的に行っているが、繰り返し行う中で、教師間で声をかけ合い臨機応変に動けるようにすること、子どもたち自身が自分の身を自分で守ることができるようにすることが大切である。
- ・不審者対応については、防犯訓練において合言葉を決めて園全体で共通理解して行ったり、子どもが全員登園したら、門の鍵を施錠したりして、幼児の安全を図っている。

視点2 幼児が遊びや生活の中で安全に関する構えを身に付けるためには、どのような環境の構成や教師の関わりが必要か。

- ・園内の環境や遊具の使い方など、教師間で共通理解をすることが必要である。また、日常の保

育の中で発達に応じた運動遊びを計画的に取り入れ、実践することが、子ども自ら危険を回避する力に結び付くようにしていく。

- ・避難時の約束を視覚的にわかるように保育室に掲示したり、危険な場所に気付けるよう子どもたちと一緒に考えたりしている。

3. 指導助言より

私達の日本という国は、ここ 2、30 年で高い確率で大きな地震が起きると言われている。この発表を受けて学びや自園で改善していく課題が見つかったのではないか。先日、文科省の湯川先生の講演の中で衝撃を受けたお話があった。私達は目の前の子ども全員を助けなければいけないという意識があるが、しかしそうではない。例えば、保育室から誰かがトイレに行った時に地震が発生したとする。そのトイレに行った子が戻ってくるのを待ってから全員で避難を開始するのか、もしくは取り敢えず今目の前にいる子ども達を先に避難させて、担任の保育者以外の保育者に、トイレに行った子どもの安全を託すのか。私達は場合によっては凄く切羽詰まった判断をしなければならぬ事態があるのではないか、というお話だった。私はそのお話を聞いた時に、もっと意識を変えていかなければならないと感じた。

発表の研究方法及び重点の中の一つに、『定期的に子ども達と避難訓練を行い、自分で考えて行動できるようにする』と書かれているが、私の園でも勿論地震による避難訓練は実施しているが、他の訓練(不審者対応、事故対応など)に比べると少しマンネリ化していて、私達自身、危機感が無かったと思うところがあった。私達は、いつ大きな地震が起こるかわからないという意識を持って毎回訓練をしっかり行なっていくことが必要である。また、子ども達自身がただ保育者の指示に従って行動するのではなく、その都度どうやって行動したらいいか問いかけながら繰り返し行なっていくことが大切である。また、園の対応で、基本的に園にとどまって保護者のお迎えを待つというところで、どの園も備蓄や資源がストックされていると思うので危険な状況でない限りは園にとどまり、子どもの安全を確保する方が広域避難場に避難するよりも、子ども達は安心すると思う。

助言として、日頃から地域の方々と連携を取っておくことが必要である。またバスについて、私立幼稚園ではかなり遠方までバスを運行している場合もある。バスの対応マニュアル作成や、バスの中に飲料水や防寒シートなどの備蓄も置いておくことも必要である。